

# 悪い仲間

—— 映画文学人生論

原作：安岡章太郎 (1953) 「群像」  
参考：ガラスの靴 (1951) 「三田文学」  
愛玩 (1952) 「文学界」  
海辺の光景 (1959) 「群像」  
流離譚 (1991) 「新潮社」

そのとしの冬から、また新しい国々との戦争がはじまった

安岡章太郎『悪い仲間』の時代は主人公のぼくが大学の予科に進んで最初の夏休みで、「その年の冬から、また新しい国々との戦争がはじまった」とあるから昭和十六年だろう。新しい国々とは米英蘭。

主人公のぼくは悪い仲間とつきあって、学校の授業をさぼり、レストランで無銭飲食をしたり、私娼窟を描いた有名な作者（永井荷風）の地誌をたよりに河向こうの女を買いに行ったりする。要するに、なまけものの学生で、軟派の不良だ。

ところが、冬のもっとも寒いある日、京都にいる仲間の一人から変な俳句の手紙が来た。それには学校から退学を命ぜられてしまったこと、悪い病気におかされたこと、そして朝鮮の田舎へ帰ろうと思っていることを、しるしてあった。

これ以上これまでの生活を続けて行けば、遠くならず彼と同じ運命をたどることは明らかだ。そんな運命をしよういこむのはイヤだった。悪い仲間たちを裏切り、真面目な学生生活に戻るしかない。

年譜によれば、作者は昭和十三年三月に、東京市立第一中学校を卒業、これより三年間、浪人生活をし、昭和十六年四月、慶應義塾大学文学部予科に入学している。

したがって、主人公のぼくは作者自身とみてよ



## 悪い仲間

映画文学人生論

い。私小説ではないかという気がするが、『悪い仲間』は昭和二十八年の芥川賞に選ばれ、安岡はいわゆる第三の新人と呼ばれる作家たちのトップランナーと目されるようになった。

戦争や外地や獄中の生活を体験して、政治的社会的問題意識の強い戦後派の文学者による重厚な作品が続出した後だけに、ダメ男の愚行を描く私小説が新鮮な印象を与えたのかもしれない。

しかし、現実には安岡章太郎も戦争体験のある戦後派作家だ。昭和十九年三月に現役兵として入営して、満州へ派遣され、八月に胸部疾患で入院し、内地へ還送されている。多くの戦後派の作家と同様、戦争体験はあるのだ。

それでも戦争体験がまったくないかのように、復員兵の臭いを消してなまけものの学生の愚行だけを強調して描いたのが『悪い仲間』である。これでは純粹な私小説とはいえない。隠し味をきかせた私小説とよぶべきか。

その後、母の病氣と死を描いたやはり私小説風の『海辺の光景』では、陸軍少将で獣医だった父親はニワトリを飼って失敗し、作者の分身とみられる息子は軍隊でかかった結核がなおらないままに寝たきりになっている。

なお、京都にいる悪い仲間から受け取った最後の手紙の変な俳句は次の通り。

来たときと同じ淋しさや、帰るときの京の春